

グリムの『蛙の王様』における ハイน์リヒのエピソード

小 高 康 正

1

グリムの『蛙の王様、または鉄のハイน์リヒ』(KHM1 *Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich*, 以下本文では、『蛙の王様』とのみ記す)の話は、『グリム童話集』(*Kinder- und Hausmärchen*)¹⁾の中でももっともポピュラーな話の一つであろう。子供向けの童話としてよく読まれているだけでなく、広告に使われたり、様々なパロディーも多く作られている。

それらを集め、分析したレーリヒ(L. Röhrich)は「パロディーやジョークのような文学的加工の点では KHM 1 は圧倒的な記録をなしている。このことは KHM の最初にあるということだけでなく、グリム兄弟がまさにこのメールヒェンを彼らのメールヒェン集の最初に持ってきた理由とも関わりがある」と述べている²⁾。

この話の解釈も、これまでベッテルハイム(B. Bettelheim)をはじめとする心理学的(精神分析的)解釈や、フェッチャー(I. Fetscher)教授の意表をつく性解放論や、あるいは、フェミニズム論的なものまで様々に見られる³⁾。

この話はドイツやロシアを中心にヨーロッパ各地に見られる<蛙の王様>タイプの話のひとつであるが、なかでもグリムの話の人気を支えているのは、蛙と王女とのやりとりで見られる極めて現代的な話の展開であろう。

特に女主人公(王女)は昔話らしからぬ個性的なキャラクターをもっている。この王女は退屈でしかたがなく、ひとりでボール遊びをしている。そのボールを池の中に落とし、蛙に拾ってもらおうわけだが、困っている時

には、友達になると約束をしておきながら、欲しいものが手にはいると簡単に約束を破り、忘れてしまう。また、蛙が城にやってくると気味が悪いと言って泣き出し、父親に約束は守るべきだと叱られると、しぶしぶ従う。そして望み通りにしないと父親に言い付けるぞ、と蛙に言われると、カッとなって蛙を壁にたたきつけてしまう、といった具合である。魔法が解かれるのも、一般には、女性の献身的な愛という、いわゆる「救済の愛」による場合が多いなかで、グリムの『蛙の王様』は壁にたたきつけるという強い拒絶の行為によって魔法が解かれるのも珍しいケースと言える。そして、ヒロインの王女が醜い蛙を壁につけると、蛙にかけられていた魔法が解け、美しい王子に変わるというシーンは、それまで段々強まってきた蛙に対する王女の拒否的感情の爆発が一気に世界を逆転させる、いわばドラマ的な展開のクライマックスを作っている。

ところが一般にこの話の筋として取り上げられるのは、以上の2人が結ばれるまでの部分で、その後ハインリヒという名の家来が登場して、2人を王子の国へ連れていくという部分はほとんど顧みられない。

ハインリヒの登場する結末部は次のようになっている。

魔法が解けて蛙から王子に戻った後、ハインリヒという忠実な家来が馬車に乗って、王子（と花嫁）を迎えに来る。かれは魔女によって蛙に変えられた主人のことを嘆き、その悲しみのために胸が張り裂けないように、鉄の輪を3本胸の周りに巻きつけたのだった。そして王子がもとの姿に戻ったのを知ると、喜びのあまりその鉄の輪が1本、1本音をたてて弾け飛ぶ、という話である。

確かにこの部分は話全体の展開からすれば、後日談か、エピソード的なものに見える。そのため従来から解釈においても特に気にとめられず、無視されたりすることも多いようである。ところがグリム兄弟がこのメルヒェンを彼らのメルヒェン集の最初に持ってきた理由を考えようとするとき、このハインリヒのエピソードはなくてはならぬ重要な部分ではないかと思われるのである。

ショーフ (W. Schoof) も、グリムの『蛙の王様』は初版において表題を変えることによって話の結末も変わらざるを得なくなったことを指摘し、表題にハインリヒの名が出されたことに注意を促している⁴⁾。そこで、

以下、表題にもなっている『蛙の王様』と『鉄のハインリヒ』という、二つの名前と話の内容との関係を考察しながら、グリム兄弟が、この話を彼らのメルヒェン集の巻頭においた意味を考えてみたいと思う。

2

グリム兄弟 (Jacob Grimm (1785-1863) und Wilhelm Grimm (1786-1859)) がアルニム (A. v. Arnim) やブレンターノ (C. Brentano) に協力することから始まったメルヒェンの収集は1810年にひとまずブレンターノへ46の話を送ることでまとめられた。これらの手稿は現在、„Urmärchen“ または、後に発見された場所の名をとって、エーレンベルク稿と呼ばれている。『グリム童話集』のもとになる最初の収集である⁵⁾。

この1810年の手稿から『グリム童話集』の編纂が始まり、1812年の初版から1857年の決定版に至る第7版まで改版が繰り返された。

グリムの『蛙の王様』のもとの話は、その中の25番目の『王女と魔法にかけられた王子』(Nr. 25 *Die Königstochter und der verzauberte Prinz*) という話で、ヴィルヘルムが1807年か08年頃に、当時住んでいたカッセルの町ヴィルト家の人から直接聞いて書き留めたものである (Rölleke 1975, S. 144-146)。このテキストは500語程度のもので、基本的な筋は現行のKHM 1と変わりはなく、ハインリヒのエピソードも含まれていた。後に詳しく見るように、その後の細かい描写や登場人物の心理的動機づけなどによって、分量も、初版で約2倍、最終的には3倍近くになった。

グリム兄弟は1812年に KHM の初版 (第一巻) を出すにあたり、この『王女と魔法にかけられた王子』の表題を現在見られるような『蛙の王様、あるいは鉄のハインリヒ』と改め、86編ある話のなかで「第1番」の番号を付けた。

その後、1813年に、同じカッセルに住んでいたハッセンプフルーク家のマリー (Marie Hassenpflug) から、もう一つの (第2の) 『蛙の王様』の話を聞いている。この話は初版第2巻目の第13番の話に『蛙の王子』(Nr. 13 *Der Froschprinz*) として取り上げられた。

それは次のような話である。王に3人の娘 (王女) がおり、それぞれが順番に泉の水を汲みに行くが、濁っている。蛙が現われ、結婚するならき

れいな水をやるという。3番目の王女が結婚の約束をし、きれいな水を手にいれる。その後、蛙は3日間王女のところに通い、3日目の朝に魔法が解け、王子に変わる⁶⁾。

こちらの話は、最初の『王女と魔法にかけられた王子』の話に比べて、本来の口伝の昔話に忠実で、素朴なものであった。

このように『グリム童話集』の初版の段階では二つの『蛙の王様』の話が取り上げられていたことになる。

ところが、1819年に再版(第2版)が出されるにあたり、初版は大きく変えられた。初版では各巻末に付けられていた学問的注釈が本巻から分離され、後に独立した巻として出された(1822年)。全体に通し番号が付けられ、整理が行なわれた。多くのテキストが削除され、残されたテキストも大幅に手が増えられ、別の新しい話がたくさん加わった(Rölleke 1984, S. 525)。

このとき、『蛙の王子』ももはや本文には採用されず、1番目の『蛙の王様』の類話として注釈のなかに入れられることになった。

結局、『蛙の王子』以外にも、グリム兄弟はいくつかの類話を手に入れていたが、それでも、一番最初に聞いた、『王女と魔法にかけられた王子』の話が、第3版以後も変わらず、第7版(最終版)に至るまで第1番目の位置を保ち、また版を重ねるごとに、更に手を加えられ文章が洗練されて、現在見られるような『蛙の王様』というグリム・メルヒェンになっていったのである。

3

昔話(folktales)の国際的な話型分類で有名な、アールネ／トンプソン(A. Aarne/S. Thompson)の分類では、〈蛙の王様〉の話は、人間と動物との結婚を主モチーフとする、〈異類婚姻譚〉の中の〈動物嫁〉(Tierbräutigam)に属し、AT 440タイプにあげられている。このタイプの話の展開は次のようになっている⁷⁾。

I 蛙との結婚の約束。(a)池の蛙が3人姉妹の末娘にきれいな水(あるいは、水の中に落としたボール)を与える。(b)引き換えに蛙と結婚するよう娘に約束をさせる。

Ⅱ 蛙の訪問。(a)娘は蛙との約束を忘れるが、蛙は玄関に現われ、入れてくれるよう頼む。(b)それから蛙は玄関、テーブルの上、最後にはベッドの中で眠る。

Ⅲ 魔法が解ける。(a)娘のベッドで眠ることを許されることによって。(b)口づけによって。(c)首を切られることによって。(d)壁におつけられることによって、あるいは。(e)蛙皮を焼くことによって、蛙の魔法が解け、王子になる。

Ⅳ 鉄のヘンリー。王子の忠実な家来は、胸が張り裂けないように、3本の鉄の輪を付けている。彼の主人が助け出されると、その輪が1本ずつはじける。

このタイプの昔話の歴史はとても古いと考えられ、文献では13世紀にドイツで書かれたラテン語の話までたどれるが、グリム以前のもので、記録として残っている最も古いものは、16世紀の『スコットランドの不平』(The complaynt of Scotlande, 1549年)の中の、『世界の果ての井戸』(Well of the warldis end)の話とみられている⁹⁾。

グリム兄弟もこのスコットランドの話は知っており、1812年の初版のKHM 1の注釈の中にそのあら筋を次のように紹介している。「一般に知られている話によれば、ある娘が継母にこの世の果てにある井戸から水を汲んで来るように言われる。多くの危険な目にあいながら、その井戸に着く。しかし彼女はまだ冒険が終わっていないことに気づく。蛙が井戸から現われ、水を汲むのを許す前に、結婚を迫る。約束を破れば、ばらばらに引き裂くと脅かす。娘は無事に家に戻るが、娘と乳母が非常に驚いたことには真夜中、蛙が玄関に現われ、結婚の約束のため、中に入れるよう求めた……最後に、蛙の魔法が解け、元の姿の王子が現われた。」(Rölleke, Heinz (Hrsg.) 1980, Bd. 3, S. 18.)

この話は先の『蛙の王子』とよく似ており、両方とも AT 440 タイプの構造の上では、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの展開で完結している。このタイプの他の類話を見ても、前半で終わるものが多く、この話の中心をなすのはハインリヒのエピソードが含まれない前半の部分であることがわかる⁹⁾。

だが、グリムの『蛙の王様』の注釈には、さらに「第3の話」として、パーダーボルン地方の話が取り上げられた。

それによると、蛙の姿の魔法を解かれた王子は花嫁をおいて出かける。その後花嫁は騎士に変装して王子を探しに出かける。王子の城で女であることがばれないよう様々な試練を経る。最後に、偽の花嫁を連れて旅立つ王子の後を馬車で追っていくが、途中、王子は大きなはじける音を聞く。そして「生まれ、車がこわれたぞ」「いいえ、ちがいます、それは私の胸のたがです」という、ハインリヒのエピソードにも出てきたやり取りがなされる。そこで王子は改めて本当の花嫁のことがわかるのである (Rölleke, Heinz (Hrsg.) 1980, Bd. 3, S. 17).

この話から王子の魔法が解けた後にさらに話が続くタイプがあることがわかる。グリムらもそれに気づいており、スコットランドの話や『蛙の王子』が『蛙の王様』タイプの話の全体ではないという考えをもったと思われる。

4

これまで「ハインリヒのエピソード」をめぐるのは、バーレントゾーン (W. A. Berendsohn) がかなり早い時期に、グリムの『蛙の王様』のテクストは「縮小された形」であるという解釈をしていた。つまり、王子の魔法が解かれた後、第2部が続くはずであったが、省略されて、ハインリヒの部分になり、「添え物」(das Anhängsel) のようになったという見方である¹⁰⁾。

その後、シェルフ (W. Scherf) は、バーレントゾーンの考えを引き継いで、グリムの『蛙の王様』の第2部として、グリムの『12人の猟師』(KHM 67 *Die zwölf Jäger*) の話が続いていたと推測をしている。つまり、王子が花嫁を残して、自分の国へ帰った後、花嫁は11人の女の召し使いと共に猟師に扮装して、王子の国へ行き、いくつかの試練を経て、無事王子と結ばれる、というのがもともとの話の全体であったというものである。そして、この同じ一つの話の第1部と第2部であったものを、ヴィルヘルムが、我々にはわからない何らかの理由によって二つの部分に分けて取り上げた、という考え方である¹¹⁾。

それでは、グリム兄弟はシェルフの推測したように、『蛙の王様』の構成面において何らかの手を加えたのであろうか。

グリムの『蛙の王様』の注釈には取り上げられていないが、グリム兄弟の遺稿の中に、あと二つの類話が残されている。結局全体で、次の五つの話がグリム兄弟の手元にあったことになる。

① 『王女と魔法にかけられた王子』(Nr. 25 *Die Königstochter und der verzauberte Prinz*)

② 『蛙の王子』(Nr. 13 *Der Froschprinz*)

③ 『第3のパーダーボルンの話』(*die Erzählung aus dem Paderbörnischen*)

④ 『3晩泣けば』(aus dem Nachlaß: *Wenn du drei Nächte weinst*) (Röhrich 1987, S. 86.)

⑤ 『蛙の王女』(aus dem Nachlaß: *Die Froschprinzessin*)¹²⁾

これらを第1部(AT 440 タイプのI~IIIまで)と第2部という話の展開から見ると、大きく二つのタイプに分れる。

ひとつは、娘または王女と、蛙との関係を中心とした展開をし、魔法が解け、2人の結婚というハッピーエンドで終わる話で、その後の続きのないもの。第1部のみの、いわば独立型：例えば、『蛙の王子』。スコットランドの話もここに属す。『蛙の王女』は構成の上からは独立型に見えるが、話のテーマも展開もかなり異なる。もうひとつは、魔法が解けた王子は、娘または王女を残して出かける(自分の国へ帰る)。娘はその後を追い、試練を経て、2人は結ばれる、という第2部の続く、いわば複合型：パーダーボルンの話や遺稿の中の『3晩泣けば』。

そうすると、魔法が解け、2人が結ばれた後、王子の家来が2人を迎えに来るというハインリヒのエピソードのついた、グリムの『蛙の王様』の話は、この部分のない、独立型にも、あるいは、さらにパーダーボルンの話のように第2部へと展開する複合型のようにもなり得る中間の形態を示していると見られる。

さらに、グリムの『蛙の王様』と第3のパーダーボルンの話との中間に『3晩泣けば』の話を置くと、<蛙の王様>から<鉄のハインリヒ>までを結ぶ一つの連続性が作られる。つまり、『3晩泣けば』の話において騎士に扮装した花嫁は「伯爵ハインリヒ」と名のり、胸のなる音に対して「忠実な心」が立てた音だと言われる(Röhrich 1987, S. 86)。しかしこ

こでも王子と花嫁（王女）との関係が話の中心となっているところが、
〈鉄のハインリヒ〉と異なるところである。

さらにシュルフの挙げた、『12人の猟師』にあるように、〈見捨てられた花嫁〉というモチーフがでてくる。第3のパーダーボルンの話も、遺稿集のなかの『3晩泣けば』の第2部も見捨てられた花嫁が王子を探しに出かけ、無事再会するわけだが、そのとき、男の姿をした、花嫁の胸に巻かれたバンドがはじけることによって、それが本当の花嫁であることがわかるのである。誰の胸にバンドが巻かれていたかによって、「胸に巻かれたバンドがはじける」という同じモチーフも異なる意味を持つてくる。花嫁につけられたバンドは、女性であることがばれないように、胸を締め付けるためのものであったり、あるいは、妊娠しているのを隠すためのものであったりする（Röhrich 1987, S. 31）。

それに対してグリムの『蛙の王様』において、家来のハインリヒが胸に巻き付けたバンドはそれらとは全く別の意味を持つことになった。つまり、苦難にあった主人のことを思う忠実な家来の悲しみを表現するものになっている。

以上のことから、AT 440 タイプには独立型から複合型までいくつかのモチーフ展開が考えられ、グリムの『蛙の王様』もその間のどこかに位置づけることができる。だが、ハインリヒの挿話をグリムらの手による追加と解釈してしまうことはできない。というのもハインリヒのエピソードは聞き書きの最初からあったものであり、レーリッヒも言うように、もとの話が古いことを示す特徴であると見られる（Röhrich 1987, S. 30）。

そしてグリム兄弟が、いくつかある類話の中から特に最初の『王女と魔法にかけられた蛙』の話を選んだ理由の一つとして、主人に忠実な家来というハインリヒのエピソードに注目した点が指摘できる。

5

グリム兄弟は1807/08年に Nr. 25『王女と魔法にかけられた王子』の話を記録してのち、1812年の初版第1巻に KHM 1『蛙の王様、または鉄のハインリヒ』として取り上げるにあたって、この話が16世紀人文主義の時代の作家ロレンハーゲン（Georg Rollenhagen, 1542-1609）の言う

『鉄のハインリヒ』であると考えたことも大きく作用した。第1巻の注釈には次のように記されている。

この話は「極めて古く、もっとも美しい話の一つで、ドイツではかつて、悲しみに満ちた胸に鉄の輪を巻いた忠実な家来にちなんで、鉄のハインリヒという名前で、特に知られていた。そういうわけでロレンハーゲンはこの話を古いドイツの家庭の話 (Mährlein) と呼んでいる。」(Rölleke 1986, Anhang, S. III)

つまり、Nr. 25 に登場するハインリヒの姿は、ロレンハーゲンの言う「悲しみに満ちた胸に鉄の輪を巻いた忠実な家来」のイメージと重ね合わされたものであった。

では、この Nr. 25『王女と魔法にかけられた王子』が『鉄のハインリヒ』と呼ばれた話とどこまで同じ話なのだろうか。

1810年以前の兄ヤーコプの残した紙片のメモには「鉄のハインリヒ、ロレンハーゲンの *Froschmeuseler* (「鼠の鳴き声をする蛙」1595年)の序文によれば古いドイツの家庭の話」と書かれた記述以外に、さらに、グレーター (Gräter) の民謡についての論評に触れ、次のように指摘している。

「三人の王女と魔法によって蛙にされた王子についての、乳母の話 (Ammenmärchen) は、全体の物語は散文で、蛙との会話や要求は詩句になっている。」そして『少年の魔法の角笛』にも取り上げられた、蛙が王女に呼びかける部分の詩句をメモしている (Rölleke 1975, S. 365)。

まず弟ヴィルヘルムが聞いて書いた、Nr. 25『王女と魔法にかけられた王子』の話が、グレーターの魔法にかけられた蛙の話と同じものであることに気づいたヤーコプは、Nr. 25『王女と魔法にかけられた王子』の原稿に『蛙の王様』(Froschkönig)と記入した。恐らくこの時すでに、ヤーコプの考えのなかにはロレンハーゲンとの関連が念頭にあったと推測される。レレケはこの点について、「魔法にかけられた蛙と、鉄のハインリヒの混交のための類似点は、ハインリヒ・メルヒェンのもっとも古い証言と見られる、ロレンハーゲンの作品 (*Froschmeuseler*) のタイトルであった」と述べている (Rölleke 1975, S. 396)。

つまり、ヤーコプは彼らの Nr. 25『王女と魔法にかけられた王子』の話が、グレーターの言う『魔法にかけられた蛙』の話と、ロレンハーゲンに

よって言及された『鉄のハイน์リヒ』とが関連すると考えたのである。

もちろん、ロレンハーゲンの *Froschmeuseler* のテキスト自体は動物叙事詩であり、鼠や蛙や鳥達が擬人化されて出てくる¹³⁾。そこに登場する〈蛙の王様〉(der Froschkönig) も人間のようにふるまうが、〈蛙たちの王〉(der König von den Fröschen) であって、魔法にかけられて蛙にされた王(人間)ではない¹⁴⁾。つまり、グリム兄弟はロレンハーゲンの作品の序文における「鉄のハイน์リヒ」についての記述に着目したと考えられる。そこにおいて、ロレンハーゲンはドイツ人の異教的な考えを示す「不思議な、家庭の話」(die wunderlichen Hausmärlein) として、『灰かぶり』や『ものぐさハインツ』などと並んで、『鉄のハイน์リヒ』の表題のみを挙げているのである (Rollenhagen 1989, S. 22)。

そういうわけで、実際にはロレンハーゲンが言っている『鉄のハイน์リヒ』の話が、グリムの話とその内容が同じであるかどうかは確かめることはできない。

考えられることは、Nr. 25 の話も最初からグリムの話に見られるような形であったのではなく、王子と王女の物語である〈蛙の王様〉の話とは別に、〈鉄のハイน์リヒ〉の話が存在していて、いつの時期からか、この二つの話が結びついた形で伝えられてきたのではないだろうか。

そして、グリムらは手元に集められた類話から、〈蛙の王様〉と〈鉄のハイน์リヒ〉との混成の可能性を推測しつつ、ロレンハーゲンの証言を裏付けとして彼らの話を肉付けしたと考えられるのである。

6

では具体的に、現在の決定版である第7版の KHM 1 のテキストを取り上げて見てみよう。その際、改版の変化を年代順に追っていくのではなく、KHM 1 のテキストの中に各版の変更の結果、何が残され、何が付け加えられたかを見ていくことにする。幸い K. シュミット (K. Schmidt) による KHM 1 の各版の変化を対比させた表があるので、それを参照した¹⁴⁾。

テキストは段落の区切りに合わせて、五つの部分に分けられるので、その順番で見たい。

第1段落 (In den alten Zeiten...Spielwerk)

この段落は、王女の紹介と、彼女が森の中で金のまりで遊ぶことが言われる。ほとんどが第3版に書き改められたものである。

手稿ではこの段落は、「王の末の娘は森へ出かけ、涼しそうな泉に腰を下ろした。それから金のまりを取り出して遊んだ…」とだけしか書かれていなかった。その後、初版で、どんなふうにもりで遊んだかが描写され、第2版で、王女は退屈だったと言われ、第3版で暑い日だったので森へ出かけ、退屈だったのでまり遊びをしたと、理由が付け加えられていった。

第2段落〔Nun trug es sich einmal zu...keines Menschen Geselle sein〕

王女がまりを水の中に落とし、泣いていると、蛙が現われる。蛙の出した条件を約束して拾ってもらう。高く放り投げ上げられたまりが、受け損ねられて、地面にはね、水の中に転がり落ちる場面の描写や、交換条件をめぐっての蛙と王女の会話のやり取りが展開されている。

この段落もかなりの程度、第3版で書き換えられているが、物語の基本的な展開を表す言葉には初版や手稿の表現が残されている。

第3段落〔Der Frosch, als er...hinabsteigen mußte〕

王女と約束した蛙は、まりを拾ってくるが、王女はまりを受け取ると蛙を置き去りにする。これも第3版において大きく見直しをされている。蛙が水にもぐり、まりを口にくわえて浮かび上がり、放り上げる場所は手稿や初版での言葉が用いられているが、王女が再びまりを手にとるところや、置き去りにされた蛙の様子などは、第3版によって細かい描写が付け加えられた。

第4段落〔Am andern Tage...du garstiger Frosch〕

蛙が城へやってきて、王女との約束の履行を求める。それは、(1)戸を開けて中へ入れてやること、(2)食卓にあげて、一緒に食べること、(3)ベッドにあげて、一緒に寝ることである。

この段落で目立つことは、これまでのように第3版での手直しがごくわずかになっており、それに代わって、第2版での書き換えが多く残されていることである。

この段落と、もう1箇所、次の段落には韻文（詩句）が挿入されているが、その部分だけは、手稿のまま語句の変更は行なわれていない。

結局この第4段落は第2版でのテキストがベースになっており、初版での語彙もかなりの程度残され、それまでの段落のように第3版による大きな書き換えが行なわれていないのが特徴と言えよう。

第5段落〔Als er aber herabfiel...(Frosch) wast (wart)〕

この段落では、蛙が王子に変身し、王女の婿となり、王子の家来のハインリヒが迎えにくることが言われる。

第4段落と同様に、ここでも初版の語彙を随所に残しながらも、第2版で書き加えられた表現が基調となっている。

ハインリヒの悲しみとよろこびを強調されたのも第2版である。„vor Weh und Traurigkeit“ (イタリック部分) „voller Freude über die Erlösung“ 等。

「ハインリヒ」という呼びかけで始まる詩句も手稿のままである(ただし、inのみ初版)。だが手稿では、ハインリヒという名が出てくるのはこの箇所だけであったのに対し、第2版以降は、『忠実なハインリヒ』という呼び方が3度も繰り返されている。これは、この段落において「忠実なハインリヒ」が重要な位置を持つことを示すためであると思われる。

忠臣ハインリヒはこの段落で初めて登場するのだが、彼は主人が蛙に変えられてしまったのを嘆き悲しみ、そのあまり胸が張り裂けないように、3本の鉄の輪を胸のまわりに巻いたと言われる。

このハインリヒの話は最初の手稿の段階から、王女によって魔法が解かれ、蛙の姿から王子に変わった後に続いているが、手稿では段落が分けられて別々に扱われていた。ところが初版ではハインリヒが馬車に乗って現われる文章が同じ段落になり、さらに第2版以降、文章構成の上で一つにつながれることになった。

(手稿) „...da legte sich die Königstochter zu ihm. /Und am Morgen kam ein schöner Wagen mit dem treuen Diener des Prinzen,....“

(初版) „...und sie schliefen vergnügt zusammen ein. Am Morgen aber kam ein prächtiger Wagen mit acht Pferden bespannt,....“

(第2版) „Da schliefen sie vergnügt zusammen ein und am andern Morgen, als die Sonne sie aufweckte, kam ein Wagen

herangefahren mit acht weißen Pferden bespannt,...“

(決定版) „Dann schliefen sie ein, und am andern Morgen, als die Sonne sie aufweckte, kam ein Wagen herangefahren mit acht weißen Pferden bespannt...“

その後、第4版では、王子は魔法使いに魔法をかけられていたこと、王女以外誰も王子を助けることが出来なかったこと、そして翌朝一緒に王子の国へ行くことになったことなどの説明が追加された。

第6段落 [Noch einmal...und glücklich war]

最後の段落は初版以来付けられており、第2版でほんの少し言い回しを変えたところが見られるが、決定版までほとんど変化はない。手稿にない段落を付け加えたのは、おそらく、„noch einmal und noch einmal“ とあるように、鉄の輪の弾ける音が3度したことを示すためであると推測される。

このグリムの『蛙の王様』も他のよく知られている、『白雪姫』『いばら姫』『狼と7匹の山羊』などと同様に、第2版で大きく手を加えられ、描写的部分が多く取り入れられた。第1段落から、王女がまりを手に入れ、城に帰ってしまい、蛙はおいてきぼりにされる、第3段落までは、さらに、第3版で書き換えられた部分を中心となっている。この版での特徴は、細部の描写がさらに押し進められ、登場人物、特に王女の心理的動機づけが強まっているのがわかる。また父王の家父長的な姿勢も強く現われている。

それに対して蛙の訪問と約束が履行される第4段落と、蛙の魔法が解け、王子に戻り、その後家来のハインリヒが迎えに来る第5段落では、それまでのような第3版での変更はほとんど見られず、第2版までの形がそのまま残されている。また第4版や第6版での加筆も随所に見られるのも特徴と言える。これは再版の段階で KHM 1 のテキストの選択が決定されたことと関係があるだろう。

ハインリヒの挿話に関する部分の扱い方をまとめてみると、

(1) 初版において、第6段目、つまり最後の部分が付けられており、話の最後に、主人が救われ、幸せになったので忠実なハインリヒの胸のバンドが弾けたのだという説明になっている。

(2) 第2版では、ハインリヒの悲しみと喜びを強調する語句の追加がなされた。

(3) ハインリヒの名は手稿では1度だけであったが、第2版以降は、「忠実なハインリヒ」という呼び方が3度も挙げられている。

(4) 第2版以降、ハインリヒの部分と前半（第1部に当たる）の部分とのつなぎ目がなくされた。

(5) そして、第4版では、王子は、自分は悪い魔女に魔法をかけられていたと王女に話して聞かせる場面が付け加えられ、王子を主人公とするプロローグがあったことを、物語の上で推測させている。

このように手を加えることによって、王女と蛙との関係が中心となる〈蛙の王様〉の部分と、変身した王子とその忠実な家来ハインリヒとの関係が軸となる〈ハインリヒ〉の部分とがテキストの上で極めて密接につながったわけである。特にハインリヒの部分の扱いは、『蛙の王様』にとってハインリヒの話が内容的に必然性のあるものにしようとする、編者の意図が読み取れるように思われる。

結局、最後のハインリヒのエピソードが強調されることによって、グリムの「蛙の王様」の話は、王女と魔法を解かれた王子との幸せな結婚で終わる〈動物譚〉の物語とはニュアンスの異なる、苦難に遭った君主と、身をもって忠義をたてた家来の物語といった性格を持つことになったと見ることが出来る。このような話の展開は、まさにグリムの考えた、蛙の王様＝鉄のハインリヒという、ロレンハーゲンの痕跡を物語において再構成しようとした結果ではないだろうか。

7

レケは、グリム兄弟が書物のなかから〈メールヒェン〉を拾い上げてくる際の基準となった考え方を3点指摘している。1「最終的に口伝えに由来するという主張あるいは推測」、2「注目に値する内容」、3「適度に芸術的な語り方」の三つである¹⁵⁾。

グリム兄弟にとってはまさしく彼らの記録した『蛙の王様』がドイツにおいて古くから民衆（Volk）の口伝えに由来している点で、また注目に値する内容を持っている点で、彼らの考えたメルヒェンの条件を備えてい

たと言える。そして、さらに、改版の度に手を加え「芸術的な語り口」を備えるにおよび、彼らの考える理想的なメルヒェン、巻頭を飾るに相応しいメルヒェンとなっていたのではないだろうか。

現代の受容の面では、王女と魔法にかけられた蛙の話の部分の方が魅力的であり、それに比べ、「ハインリヒのエピソード」はしばしば脱落したり、無視されたりしているが、グリム兄弟にとってはハインリヒのエピソードは、現代におけるフォークロアの概念をもった最初の考え方と見られる〈自然詩〉(Naturpoesie)としてのメルヒェンを裏付けるための重要な部分であったと考えられる¹⁶⁾。

今日、『グリム童話集』は度重なる改作によって、本来の民衆の口伝えの話から離れた、読むための „Buchmärchen“ になったという見方が定着し¹⁷⁾、さらにはヴィルヘルムによるイデオロギー的脚色が強くなされているとも言われるが¹⁸⁾、それまで学問的に省みられることのなかったこのジャンルに初めての系統だった収集を試みた事情を考えると、グリム兄弟がメルヒェン収集の初期に遭遇したメルヒェンの概念についての問題は極めて大きかったに違いない。つまり何をメルヒェンと見るか、という問いから出発しなければならなかったわけである。そして彼らが提示した一つの解答がこの『グリム童話集』の最初に置かれた KHM 1『蛙の王様、または鉄のハインリヒ』であったのではないだろうか。

注

- 1) 『グリム童話集』 „Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm“ (KHM) の使用したテキストは次のとおりである。

Röllerke, Heinz (Hrsg.): *Kinder- und Hausmärchen*. 3 Bde. Stuttgart (Reclam) 1980, 1. Bd., S. 29-33.

Röllerke Heinz (Hrsg.): *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm*, Cologne-Genève 1975, S. 144-149.

Röllerke, Heinz (Hrsg.): *Kinder- und Hausmärchen. Nach der zweiten vermehrten und verbesserten Auflage von 1819*. 2 Bde. Köln 1984, 1 Bd., S. 9-13.

Röllerke, Heinz (Hrsg.): *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Vollständige Ausgabe auf der Grundlage der dritten*

- Auflage* (1837). Frankfurt a. M. 1985, S. 23-26.
- 2) Röhrich, Lutz: *Wage es, den Frosch zu küssen! Das Grimmsche Märchen Nummer Eins in seinen Wandlungen*. Köln 1987, S. 75.
 - 3) B. ベッテルハイム『昔話の魔力』, 波多野完治・乾侑美子共訳, 1978年, 評論社, 369-375ページ, I. フェッチャー『たれが, いばら姫を起こしたのか』丘沢静也訳, 1984年, 筑摩書房, 215-228ページ, Rölleke, Heinz: *Die Frau in den Märchen der Brüder Grimm*. In: *Wo das Wünschen noch geholfen hat*, Bonn 1985, S. 233 等を参照.
 - 4) Schoof, Wilhelm: *Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich*. In: *Wirrendes Wort*, 7, 1956/57, S. 46.
 - 5) この経緯については上述のレレケの次の箇所に詳しい. Rölleke 1975, „Zur Entstehungsgeschichte der Sammlung,“. S. 341-347, und Rölleke 1980, 〈Nachwort〉, S. 593-602.
 - 6) Vgl. Rölleke, Heinz (Hrsg.): *Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815*, Göttingen 1986, S. 91-93.
 - 7) Aarne, Antti/Thompson, Stith: *The types of the folktale*. Helsinki 1981 (First published, 1961), S. 149.
 - 8) Vgl. Thompson, Stith: *The Folktale*, Berkeley 1977, S. 101. Bolte, Johannes/Polivka, Georg, *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. 5 Bde., Hildesheim 1982, I, S. 4-5.
 - 9) Vgl. Röhrich 1985, S. 87-118. ここでレーリヒが取り上げたグリム関係以外の各地のヴァリアント8話では第2部はなく, ハインリヒも現われない. またボルテ/ポリーフカによって36話の特徴が示されているが, ハインリヒについては触れられていない.
 - 10) Berendsohn, Walter A.: *Grundformen volkstümlicher Erzählkunst in den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*, Wiesbaden 1981 (Erste Ausgabe 1921), S. 44f.
 - 11) Scherf, Walter: >*Der Froschkönig*<. In: *Lexikon der Zaubermärchen*, Stuttgart 1982, S. 126.
 - 12) „*Die Froschprinzessin*.“ In: H. Rölleke (Hrsg.), *Märchen aus dem Nachlaß der Brüder Grimm*, S. 23ff.
 - 13) Rollenhagen, Georg: *Froschmeuseler*, Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker Verlag) 1989. Vgl. <*Froschmeuseler*>. In: *Kindlers Literatur-*

Lexikon im dtv, München 1986, 5. Bd., S. 3712 f.

- 14) Schmidt, Kult: *Die Entwicklung der Grimmschen Kinder- und Hausmärchen seit der Urhandschrift*. Halle (Max Niemeyer) 1932, S. 271-285.
- 15) Rölleke, Heinz: *Die Märchen der Brüder Grimm*, München 1985, S. 87.
(レレケ『グリム兄弟のメルヒェン』(小澤俊夫訳, 岩波書店, 1990, 154ページを参照).
- 16) 拙稿「Gattung Grimm (グリム・ジャンル) — 『グリム童話集』のメルヒェン・ジャンルについて」(長野大学紀要, 第9巻, 第4号, 1988年, 24ページ参照.
- 17) Tismar, Jens: *Kunstmärchen*, Stuttgart 1983, S. 59. Vgl., Buchmärchen“ (H. Bausinger). In: *Enzyklopädie des Märchens*, Berlin 1979, S. 974-977.
- 18) 最近のアメリカにおけるグリム童話研究の基調をなしていると思われる。Vgl. Bottigheimer, Ruth B.: *Grimms, Bad Girls and Bold Boys*, Yale University 1987 (邦訳『グリム童話の悪い少女と勇敢な少年』(鈴木晶ほか訳, 1990年, 紀伊国屋書店); Tatar, Maria: *The Hard Facts Of The Grimms' Fairy Tales*, Princeton University Press 1987 (『グリム童話—その隠されたメッセージ』鈴木晶ほか訳, 1990年, 新曜社)。

<付記> 本稿に日本独文学会1990年秋季研究発表会における口頭発表の原稿に加筆したものである。

Die Heinrich-Episode von KHM 1 „*Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich*“

Yasumasa KOTAKA

„*Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich*“ ist eins der populärsten Märchen in den „*Kinder- und Hausmärchen*“ (KHM) der Brüder Grimm.

L. Röhrich sagt: „Hinsichtlich der lit. Bearbeitung wie der Parodien und Witze hält KHM 1 den absoluten Rekord. Dies hängt nicht nur mit der Stellung der KHM zusammen, sondern hat denselben Grund, warum die Brüder Grimm gerade dieses Märchen an den Anfang ihrer Sammlung gestellt hatten.“ (L. Röhrich 1987, S. 75)

Sowohl in den literarischen Bearbeitungen als auch bei den verschiedenen Interpretationen handelt es sich thematisch nur um die Erzählung der Königstochter und des verzauberten Prinzen. Man beachtet aber den Schlußteil mit der Heinrich-Episode nicht.

Aber wenn man an die redaktionelle Bedeutung als Nr. 1 in den KHM denkt, ist es klar, daß die Heinrich-Episode für die Brüder Grimm sehr wichtig war.

Bisher haben wir über die Heinrich-Episode einige Ansichten kennengelernt. Früher hat W. A. Berendsohn über „das Anhängsel vom treuen Heinrich“ gesagt, daß Nr. 1 eine verkürzte Form sei. W. Scherf hat auch ähnlich vermutet, daß KHM 1 und KHM 67 „Die zwölf Jäger“ Teil 1 und Teil 2 eines einzigen Märchentyps seien.

Haben die Brüder Grimm ihren Text in den KHM umgearbeitet? Die KHM-Urfassung, die sogenannte Ölenberger Handschrift, die

die Brüder Grimm im Jahr 1810 an Brentano sandten, ist ihre früheste Märchensammlung.

Das als Nr. 25 „*Die Königstochter und der verzauberte Prinz*“ vorgestellte Märchen steht seit der Erstauflage von 1812 stets als Nr. 1 der KHM-Sammlung. Aber der Titel wurde zu „*Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich*“ verändert.

Obwohl die Brüder Grimm später einige Varianten des Froschkönig-Märchens, darunter auch eine mündlich getreuere Fassung wie „*Der Froschprinz*“ (Nr. 13, 1815) bekommen hatten, zogen sie aber den KHM 1-Text den anderen Fassungen vor.

Nach Aarne/Thompson gehört KHM 1 zum Typ AT 440, einem Tierbräutigam-Märchen. Der motivistische Aufbau von AT 440 ist folgendermaßen: I. Versprechen, mit dem Frosch die Ehe zu schließen, II. Besuch des Frosches, III. Entzauberung, IV. Der eiserne Heinrich.

Aber dieser Typ enthält nicht unbedingt das Motiv des Heinrichs. Er kann einen anderen motivistischen Aufbau haben, in dem der zweite Teil der Entzauberung (I ~ III) folgt, wie die paderbornische Fassung: Die verlassene Braut sucht den Königssohn auf und so weiter.

Jacob Grimm hat zuerst das von Wilhelm notierte Froschkönig-Märchen (Nr. 25) als Erzählung von <dem eisernen Heinrich> angesehen, dessen Namen Rollenhagen (1542-1609) in der Vorrede zu seinem Werk „*Froschmeuseler*“ (1595) angegeben hatte. Davon haben die Brüder Grimm abgeleitet, daß die Version der KHM 1 keine Vollform sei.

In der Bearbeitung der KHM 1 von der 1. bis zur 7. Auflage hat Wilhelm, wie folgt, die Rolle des eisernen Heinrichs betont:

1) Im ersten Druck von 1812 kommt ein Schlußteil hinzu, der sich in dem Urmärchen nicht findet. Dieser Zusatz beinhaltet, daß der treue Heinrich glücklich war, weil sein Herr erlöst wurde.

2) Ab der Zweitaufgabe (1819) erscheinen die Wendungen, die die Gefühle von Heinrich zeigen, z. B. „vor Weh und Traurigkeit“ „voller Freude über die Erlösung“.

3) Der Rufname, „der treue Heinrich,“ tritt gleichfalls dreimal ab der Zweitaufgabe auf, in dem Urmärchen aber nur einmal.

4) Mit jeder verbesserten Auflage wurden die zwei Sequenzen, der Teil des Froschkönig-Märchens und der der Erzählung von Heinrich, untrennbar.

5) In der 4. Auflage erzählt der Königssohn den Hergang des Unglücks, als ob es die Vorgeschichte des Königssohns und Heinrichs in diesem Märchen gäbe.

Daraus ergibt sich, daß das Grimmsche Froschkönig-Märchen von dem Tierbräutigam-Märchen zu der Erzählung des seinem Herrn treuen, idealen Dieners namens „Heinrich“ geworden ist. Schließlich wurde das Grimmsche Froschkönig-Märchen als Erzählung von <dem eisernen Heinrich> (Rollenhagen) rekonstruiert, weil die Brüder Grimm gerade dieses Märchen für eines der „ältesten in Deutschland“ gehalten hatten. Und man könnte sagen, daß ihnen die Gleichsetzung der Urfassung vom Jahre 1810 mit <dem eisernen Heinrich> der Beweis für die Idee der „Naturpoesie“ ist.